

街路にあることの気分と相互主観的存在構造について
——(C), 遊戯性を契機にして,

素描 (共同存在的空間論⑧) ——

水 田 一 征*

(昭和61年9月29日受理)

Die Stimmungen und die intersubjektiven Räumen-
Strukturen des Auf-der-Straße (u. Gasse)-Seins.

——Teil C, Spielhaftigkeit und urbanische Straße,
(Untersuchung Zum Raum-Phänomen Des Mit-Seins, VIII)——

Kazuyuki MIZUTA*

(Received Sept. 29, 1986)

Auszug;

Es ist leicht erkennbar, daß das Spiel, ein fundamentaler Zug unseres Daseins, sich bloß empirisch auf das städtliche Leben bezieht.

Von der phänomenalen Vergleichung des Auf-der-Straße-Seins mit dem Spiel, wird hier das ontologische Struktur des Mit-Seins auf der Straße klar gemacht.

Der Hinweis auf den analytischen Momente des Spiels nach E. Fink——Stimmung der Lust, Gegenwärtigkeit und Unwirklichkeit als das Schein, ——dient uns als Leitfaden für ein strukturanalytisches Verständnis davon, und zwar Horizontal-Struktur der Stimmung und Atmosphäre des Auf-der-Straße-Seins.

Schlüsselwörter;

Spiel, Lustigkeit, Gegenwärtigkeit, Unwirklichkeit, Straße

§ 承 前

同じ集住形式でありながら、町(タウン)と都市や都会と人が呼ぶものとの差は、大規模な公共建築物があるかないかにありとする論¹⁾は、いかにも人を説得する意味内容を含んでいるようであるが、はたして、個々の生にとつての住にとり、実存的な空間としての都市にとり、十分にその根拠を記述している言説と云えようか? 当然に、公共建築物とは単なる物理的で機能的なそれを意味していないことは明瞭であろう。

町や村落の住居は例えば、町の住居として、都会の住居として、形相と範疇を、関係と地平を背景にして異として、つまり全体としての差異をそれなりに自現して、各々それ等であるのと同様に、公共建築物も此の際、全体として異なるものとして了解的に自現する。都市の路は、町の路と違って、同じ機能を果しつつ都会的な路と自己を現わす。

体験するに容易で、顕在意識的に説明の困難な事態でそれはあろう。このことは、それらの事態が、明白

* 建築学教室

で透明な志向の眼の正面に像を結ばない様態に、その存立の地平を持っていることを暗示している。

私は、日常生活世界で生活している。ということは、どこかへ行ったり、何ものかへと意志的に手を伸ばし眼を向けたり、いわゆる様々の行為の連りを、始めては終り、なおまたその行為の全体が別の地平の行為や営為の始まりであったりする種々のレベルの行為の全体構造を、日々の行為と生きている。

その際、全ての事物に私はいつも既に、世界の、あるいは場のなかに在り、行為は恒に、既にして確立されたる“ここ”から“そこ”へ、“そこ”から“ここ”へと、意識の表に立てられた渡る動きや志向性として行為する。そこには、ここを“ここ”とし、そこを“そこ”とする既にして確立された働きが有り、開けがある。

そこで、感情こそが、その世界開示性に近づく秀れて契機たりえる。その開かれた世界(場)で志向性が、～への意識として自立する志向性として、張りめぐらされる志向性の活動空間(Spielraum)であり、また[志向性がどのようなものになるかはこの活動空間がどのようなかたちで開かれるかに懸っている。感情が問題となるのはまさにここにおいてである。]²⁾

それは、非志向的な場の開けとしての既在であり、被投的で既在である故に世界的であり、またそれ故に場の気候³⁾であるその場の情態性⁴⁾である。

M. ハイデッガーの気分づけられてある世界の現われが持つ sich richten auf～の能力は、普段、我々は顕わには気づかれない。つまり、いつもたいていは、自からの発意で自らの行為を隅々まで生きるべきとする志向の世界と見做して、場の被投的指示性は看過される。

そこで顕在するのは、また人が没頭するのは、専ら、あれやかれやの個物や他者との直接的な指示関係である意味であり、意識は、その顕現している限りでの、本来制限されている範囲での、見る私であり見られる私であることに集中している。

志向的意識のヴェクトルの能作からして、あたかも私と他者や対象が、独立して対照的に対応していると仮定する科学的世界観が、人間の行為の基盤であるかの如くに理解されている。

此の世界の既在性の関連を、サルトルは、情緒とは世界の変形(une transformation du monde)と了解すること⁵⁾と総合する。

都市の街路も、都市そのものと同じように恒に既にそこに具体的に個性として(ということは顕在志向性にとっては目立つものとして)、あるいは広がりとしての雰囲気として在るものである。

しかもそこに関わる人は自己の意のままに何時でも出入り可能な現実そのものである意味で、限界と所在性の恒常を備えた明証的実在と現象する。以前の論文⁶⁾に於て粗描された如くに、その形相と範疇を備えて街路は、他の路や領域と生きて切り結びの只中に在ることが云い得よう。再言すると、都市と同様に、街路もその生きた連関で背景的に、他のものと差別的に或る個有なものを指示している。

巷間、近頃、都市が都市らしくなくなった、とか、本来都市が備えていた刺激性を失って来たとか、見るに耐える芸術性を欠いて来た⁷⁾、などと云われることがある。物理的事実や経済的事実としての都市は、場合によってはかつてのそれを遙かに陵駕する程に肥大して充実して来ていると云える程であるのに……。

とすれば上記の慨嘆は一体何の喪失を愁うのか? 以前から今に至るまで都市は、闇の部分やうさん臭い部分を、快楽や悦楽の部分、いつも合せ持って来ている。それでもなお、面白くなくなった近代都市とは、何を指して失ったとも変ったとも云われるのか?

都市は本性上、遊民を充実して生々とせしめる場であった⁸⁾、との言説を、刺激性や芸術性の欠除の事態でその本性を失ひつつあるとの直観と重ね合わせてみると、どうやら真面目で合理的な日常生活からの逸脱を、つまりは真正の遊びの部分、都市の中心から失った事態、生活が平板化した事態とも見る事ができるだろう。

このことは、また、目的に適った合理的で効率的な行動——例えば買物や仕事——と、金を払って瞬時だけ我有化を許可されたエンクローズする場——喫茶店やレストラン——や、唯一、解放された場でありえる公道上の車の中、これ等の場所以外に居ることが仲々出来ない今の都市の状況と、余剰と遊び心を収容してくれない街と直面するだけで判ることである。

その典型的部分との予観のもとで採り上げられた街路の意味が、目的を専ら主旨して効率と利便を顕現して具体する用存在にその基礎を置く“道路である”ことを超えたものである事実は、上記の欠如の事態や前回の歩きの粗描表現を散見するだけでも直観できる

し、又、了解的で客観的な現実であろう。

そこで行なわれる金と物品との取引は、全体として、買物という機能を全うする行為のみではなく、ショッピングと称せらるべき都市特有の、ついでに買物をも含むような行為であろう。そのそこには、ショッピングたらしめるような全体の場の力が支配しており、金さえ出せば得られる充実ではない。その背景としてのものを含む全体である“街（まち）”なるものの意味は、丁度、ブランケンブルクが云うところの自明性（Selbstverständlichkeit）⁹⁾と重なるものと云えるだろう。彼の患者アンネの眼には、或る場の他者が振舞う行為がごちなく、かつての自然さを失って見え、その場でのアンネの行為も、外の他者からは、そこに居る生きた人の行為と、どこか妙に一致して見えていない。彼女は、その中でその意味が判らず、あらゆるものを努力して真面目に目前に据えて意図的に捕え直して、認識的に対応することで、やっとその現実の時空（の場の意味）を演じさせている。“いま、ここ”があってこそその“いまのもの”と“この人”である¹⁰⁾はずのものが、逆に、ものを“いまのもの”や“この人”と見做さんとすることで、“いま、ここ”を（ひいては Weltlichkeit を）支えんとする努力に続く失敗として、病いは把えられている。そこ、病いの世界では、ものや人の《互いに共に (miteinander)》が《互いに反して (gegeneinander)》に解体して¹¹⁾、場の雰囲気は後退して根源の相に落ち込んでいる。

都市の街路の全体——〈街路〉——は、当然にそれ故、その場に特有の miteinander へと人と物ごとを集積 (dingen) し、人や物ごととは雰囲気に気分づけられて teilnehmen einander するという自明な在り方をしている空間であると云いえる。

その根源様態は、前回の記述で¹²⁾、気分的に、高揚、軽快、広がり、浮遊、など非日常的世界の質への傾きに在るとされた。

類似した質の非日常を最も強く典型的に生きるものに、遊び (Spiel) の空間がある。真面目さの逸脱と直観した都会的なことと同質な傾きに在る故に、遊びの要素を契機として、更に街路の miteinander を同定してゆくことが、今回の素描では自論まれている。

遊戯性や演技性と街路の空間の質との近似性の直観は、既述の素描を通して妥当していると云えよう。今回は更に進んで、その両者の差異と類同を手立て

に、街路での人の現象様態と存在様態に眼を向ける。

§ 遊戯 (Spiel) と都市の街路

今回の此の記述の導きの糸である遊戯 (das Spiel) については、主として E. フィンクのそれを筋目とする。というのも、E. フィンクの遊戯論¹³⁾は遊戯の存在論的考察を主題としているが故に、此処での都市街路の空間論が、単なるあれやこれやの空間記述だけに留らないためにも、対照する遊戯論も、遊戯のあれやこれやの現象学的記述¹⁴⁾に向かわなくて人間存在の重要な契機としての遊戯に関わるものが選ばれた。

フィンクによると、通常の日常生活世界での体験の内では隠されている世界関係 (Weltverhältnis) が、人間の営為の一切を包括する基礎地平としてあることが、正に美的体験や子供の遊びを含めた遊戯こそが世界開示の契機として働くことを通して、見出されるという。人間は、彼の『世界位置づけ (die Weltstellung) を遊びの一定の了解の導きの下で』¹⁵⁾ 知るのである。

言葉が持つ本来の脹らみを削ぐ危険をおして、遊戯の契機の意味構造を抜き出すとすれば、以下の様に簡潔化出来ようか？

現実世界からの独特の在り方で離脱と訴えかけを同時併存させながら、無目的的で没価値的な個々の感情的一体化 (Miteinander-Sein) の共働空間 (Mitraum) を雰囲気の意味 (Sinn) として生かしつつ、端的にいまを共演 (Mitspielen) する¹⁶⁾ ことに遊戯は存る。

遊んでいる折に誰れでもが感じているのは、特別に自由であることで、その自由さが生む屈託のない程の快活さと明るさが、その自由であることと同義の仮象と昂揚した軽さを伴っていることである。殆んど浮遊していると云ってよい程の束縛のなさ¹⁷⁾に在る。

当然に、その自由さを遊びながら、遊んでいる人ゆえに気づいている事だが、その自由さは、現実世界の重さと切れた遊戯世界の完結性にあり、遊びはそれ故に、遊戯世界の外に、目的も原因も結果も直接求めない。特異な限定された時間、空間に生きている¹⁷⁾。つまり非現実的な場面である。それは現実的なものと激しく対立し、ありありとその差異を見せつけて、最も特異な、遊びの契機と映る。

〈街路〉の対照的基盤地平の現実化として描かれた¹⁸⁾〈路地〉が、平静な真面目と労働という有目的な効率的な行為の連鎖を基とする日常世界の相貌と記述され、人はそこでは、異邦人か、ホッと自己を取りもどす処とされた。

〈街路〉はその最も甚だしい例は、祝祭日の混沌とエネルギーに充ちた非日常の喧騒の場合と云っても外れてはいないだろう。儀礼ではない日常では気恥しい様な極彩色と眩輝も、縁日のな小屋掛けの臨時性と同日非日常を表現して、それ故に許される。

その活気のある昂揚感は都市内の街路を大なり小なり充ちていて、そこに居る人を幾分とも自己を超えて自己の外へと出て立たせる。がしかし、自己を失う程には開かれた離脱ではない。陶酔や忘我の様な極端な祝祭などの昂揚の気分¹⁹⁾のように、個別性の限界が破壊された根源調和の状況ではなく、個の限界はやや曖昧ではあるが確立している。何かあるものへと自己をゆずり渡し指し向ける安心と信頼に在る、と云ってもよかろう。場合によっては、かなり易々と制御してそこから自己をとりもどすことも可能な程に……。

ただし基本的に、強さや活発さや軽やかさへの飽くなき希求の真面目さに欠け、或る一定の開放と溶解の持続として、より広い中性的で普遍的な傾きを持つ喜ばしさの広がり(Gegend)の眺望に、人は生きる。自己の肉の喜悦というよりは、場の興奮と漂う。今は決して留って静止しているのではなく、次から次へと後続する今であって、来る未来も過ぎ去りし過去も、その今の内に支部を保っている限りでの今という未来であり、荷重のない過去である。

此の状態の享受へと身を開いて在ることは、ここでのウィンドーショッピングなどの行為の風景に妥当していることが直観される。此の享受は、全くの受動的態度のそれではなく、明るく楽しいもの、賑やかで小さな驚きに開かれた非理性的態度であるが故に、思わぬ衝動買いや珍奇なものへの志向が生じる故縁となる。喜ばしい気分や昂揚した気分が、『人間を把える時、彼は閉ざされた孤立した存在の中にとどまることが全くできず、生や新しい人生経験……、他人との接触に対して、自らを開くのである』²⁰⁾。

身体的な拡張は、主客は融合し、周界に没していることを示している²¹⁾。

演劇や画像の世界や子供の遊びに共通に見られるように、遊戯には雰囲気の意味(Sinn)が付帯している²²⁾。その意味には構造的に非現実的仮象(das unwirkliche Schein)があり、その質を決めている。

街路も、主体や事物的意味を特化させる路地と較べて、その現実性から距離を取ることで生成する意味空間(Sinnraum)であることで、幾分かのを遊戯と通底していると云えよう。

これまでの論拠では、此の二者が、同一のもの二表現態とまでは同定出来ない。つまり、街路は遊びの一樣態と云ふには、切実な現実性を感じない訳にはいかない部分があることも直観として確かである。

であるがかなりの処、空間的質の契機に、構造的に同じ傾きを保持していることは識った。

一つ一つの様態の類似比較にとって、また、悉皆的な比較構造をとったかどうかとも、此の際は問題にしない。街路の対日常生活世界との関連へと光をもたらしてくれる契機が、専ら選ばれて、その存在(論)的構造に、焦点は当てられる。このようにして、両者を共約する契機として、現在性、非日常と仮象性、親密さが選択された。

§ 現在性

都市の都会的雰囲気は、街路での歩行の際の気分表現し、その歩行は通過や前進のそれではないいわゆるブラブラ歩きや遊歩である、と記述された²³⁾。

人間にとって物を見たり認識したりする行為は本来何らかの行動のなかでなされ、そこではそのリズムを地平としリズムに励まされて認識が成立して来るが、行動が違えば同じ風景が違って見えて来るものである。だがそれでもなお、あれこれの具体的な身体運動や事物が時として個々を違って出現して来ても、その街路では同じ変らないものが、私を貫いていることの直観を持つ。或る街路から別の街路に移った時、動きの変化と共に雰囲気の変化も識る。がまた、都市の街路に共通する晴の契機も両者に共有して滲みている。差し当り、鋭角的な目標のない“場を当り、場を占める”歩みは、独りごつ呟きに似て、取り敢えずの現実性に目覚めているが、より目前の対象には直接的に志向していない非現実的な配慮の仕方を体して、所を得ている。

ここでは、充実する道程も奥も場所の変遷も、基本的な生成の構造には関わらず、歩行に特化される特別

なりズムの身体運動に裏打ちされた独特な昂揚した気分が支配する。差し当りを取り敢えずの歩の運びは、運動意識の内在化をリズムにまとめて地平化し²⁴⁾リズムとその歩みが現象的に現在的であることを保障し通す。目的を持たざる歩みは、場を超え出ることがないことで未来的ではなく、過程や歴史を歩みに表立てない意味で過去と距離を隔て、その場のリズムに乗って漂い安着していることで現在的である。

走り廻るのでもなく、停止して静かでもない人々の動きは、その街その街路に特有なものがあるはずであって、そこでの人々は明らかにそのリズムに共感して動いている。そこには、時間の経過に分節的なものではなく、ただ活々と段落なく漂っている。

繁華街やアーケード街といわれる街の中心の街路でも当然、買物という生活必需品を求める目的行為の機能もふんだんに、或いは含んでもいる。だが、それは場合によっては、街路をより街路らしく在らしめる契機要素ではあり得ても、スーパーマーケットでの購買行為と違って、必ずしも不可欠の機能ではなさそうである。つまり、買うもの食べるものがなくても近寄りたくなるなにかがあるようだと考えられる。

同じ買う行為でも、どこか現実生活の切実さや真面目さとは別の、どこで中断してもかまわない行為のように曖昧な、行為というよりは図化しつつある気分の変換のような調子がある。意識は、功利的なものに図的に鋭角的に向かわず、ある範囲の広がりには漠として目覚めていて、なおお現れ出で来る新奇で珍奇なものには眼が向く意識である。意識が非意識的に関わる調子はリズム的である。

というのも、リズムは本質的に、習性、慣習、伝統という身体運動の現実的な態位や、例えばM. ポンテイーの身体図式の直接的で無意識の現実態を、超えて“開かれて在る”現在性を離れては在りえないからである。運動そのものの表現が、認識的な意志主体の中心的から、環境の広がりへと滲み出て現在的である。

身体図式の固さではないリズムの柔軟さを動きの調子に持っていることは、途上に生起するあれやこれやの小さな出来事——食事、ショッピング、見世物、大道芸、等々——に開かれ、関与出来る小さな変曲を、同じ質の気分の内に、難なく含み込んで流れる自由さに見ることが出来る。それ故の志向対象の図地の不分明さや地化する図は、また通常の時間を経過から切り離して、場を全体として現在化させる。

今に次ぐ今の連続と形容出来るかもしれない街路に於る歩の現在性は、遊戯に於てより純化した姿で窺うことが出来る。

『遊戯は現在を与える』²⁵⁾とフィンクが云う時、『われわれの本質の深みのなかで静止し、世界の永遠の息づかいを聞きとり、過去の流れのなかに純粋な形象を見る、あの現在』ではない。今まさに創造的であり通している現在、現在進行態で今將に動きつつ在ることに隅々までに占め尽されている現在である。

既述の様に、街路でのブラブラ歩きに典型した開けを見るリズムに内在する現在性は、その完結した時空に起因すると考察されたが、その現在性も、決して、絶対静止としての氷結した不動の絶対的現在ではなく、開かれた身体の生きて動いていることに内在する息吹きであった。正に、遊戯の活動的創造行為の時間性に近いそのようだ。

此の現在性は、遊戯性の第一の契機である非現実性(die Unwirklichkeit)と主体の超現実性(die Überwirklichkeit)²⁶⁾と相即の事態である。

そのことはフィンクの言説の中に見出すことが出来る。

『遊戯はあくまでも活動であり、創造である——が、しかし、それは永遠の静かな事象の近みに立つ。遊戯はわれわれの生の歩みの連続性を究極的に規定された連関性を「中断する」。それは不思議にも他の生の営みからは抜けだして、距離を保つ。しかしそれは統一的な生の流れから逃れるように見える、まさにそのことによって、かえってその流れに意味深く関係する——つまり表現という形において。』

その生の世界の時の経過を中断し、空間に隔りを置くことで生成する現在性は、木村敏が²⁷⁾、病いとしての日常性の2つの意味方向——自己の可能性の追求という未来と、既知の慣習や経験の保守的な埋没である過去——の極端化とは別の、第3の日常性の破壊と称する狂気に通底していると考えてよいだろう。

それは非理性の時間として、愛の恍惚や自然との一体感や芸術的超越体験などの形で出現する非日常であり現在性である。そこには、現実と非現実との時間的空間的な二重性、現実の時空のパラフレーズされた非現実の時空の仮象性が在る。

§ 非日常性

都会の街路の空間、「街頭」には、いろいろのもの

やことが顔を見せてくれる。

特別な展示などの催しもあれば、人眼を引くような店や物もある。又、いつに変わらないその活気に充ちたりリズムもある。それは、人の心を浮き立たせ、惹きつける。いわゆる盛り場の魅力がある²⁸⁾。

自分が毎日毎日を暮している日常の暮らしにはない晴の気配がある。

その路の傍に在るレストランや喫茶は、単なる食堂ではなく、そこでの“食べる”、“飲む”行為ですらも、どこか単に空腹や喉の渴きを癒すのみの生理的な摂食行為ではない響きがある。空腹を中心化頭在化して切実に食に向かわずに、それを下部構造とした“文化を採る”ニュアンスの、“雰囲気食する”行為に近く、そこで体験的現実、日常生活の家庭のそれとは別種の内実を備えて、それはそれとしてはるかに、意図が籠って印象的である。

このことは、そこでの気分は、現実の生活世界の機能や実存を超え出ているが故と、まずは一言、云っておいてよいであろう。つまり、非日常的で非現実な傾きに在る。

同じ傾きを、遊びに際しても見ると云っても無理な押しつけではないだろう。

『遊びには、一般に周知の仕方で「非現実性」の契機が属する。』とフィンクが云う時、彼は日常との関連が主導のモーメントとなって遊びの特質を決めると直観する。つまり、『われわれが遊びを遂行するときに感ずる屈託ない快活さ、全体的な生の気分の明るさと軽さ、つまりほとんど浮動さとも言えるものへの変化は実存的重圧の生の次元からの逃避にその根拠を持つ』²⁹⁾と直観する。

軽さとは、快活さとは、その方向への、つまり生の重さへと反対の方向へと、超え出る身の在り方を云い当てている。

しかも遊びが遊びに留まり、完全な逃避——例えば精神の病——の如き単なる全き超脱ではないことは、その遊びが現実性を帯同した非現実であることの二重性——「仮象」(Schein)³⁰⁾——にある。このことは、遊びとは単に夢のように奇妙で特異な感覚像を与えるという戯乐的で眩惑的な生の否定ではなく、確実な事実であり、遊びの現実とでも云へるものである。

遊びを決定づける重要な非現実性の契機である現実のパラフレーズとしての現象様態として、仮象の様態であった。

だから、そこ＝遊びの場とし、そこ＝遊びの外と出来る傍観者も在り得るし、たいていの場合、その傍観者が在ってますます、遊びをこことする遊ぶ人の遊びは、冴えて濃厚な雰囲気と共有するようになる。

そこでは、素朴で真面目な日常生活の生の遂行のような、どっしりと存在する存在者やものの事物性に依存する存在者の実存とは懸隔して、ものごとは現われる。仮象として、あたかもその遂行としての「かのような行為(ein „Tun, als ob“)として、軽やかな活気に充ちて現象することを、遊びは、包含している。

『遊びは、稀にしか見ることの出来ない、「存在」と「仮象」の纏れ(Ein Ineinander von „Sein“ und „Schein“)として、相即的に同時に、仮象する存在(ein scheinendes Sein)であり、存在する仮象(ein seiender Schein)である。』³¹⁾

虚構的非現実性とは云え、遊びは、現実のパラフレーズをそのまま出現せしめる処に、現象的意味の契機がある。ものの現実からの離脱と保持の、両義的な傾きの現勢化が、その現在性と創造性の地平をかたちづくる。

その仮象と現実の纏れの関係を、遊びの仮象性が最も強く表に立つ舞台上の演技に見てみよう。その際、当然に、仮象とは演じられる空間や役柄だし、現実とは板の舞台や生身の役者その人を指す。

役割としてのパーソナリティーや痛みは、その役者のパーソナリティーや痛みではないものとして、しかし、別の“今”と“そこ”として真面目に迫真的に、ありそうな現実を、さも現実的に演じる新派の劇にも、当然に、パーソナリティーの二重のズレや、舞台とその劇中の場所の二重奏などなどのパラフレーズはある。あるが故に、その人の痛みと見る人に訴えて来ずに、劇の中の歴史に生きる痛みと知れるのである。

その仮象性は、例えば、女が男を演じる宝塚のレビューや、男が女を演じる歌舞伎では、より強くその重奏性が補強される。補強され濃厚にされるからこそ、より虚構的な仮象となり、男であること——存在——と女であるべきこと——仮象——、女であることを素材にした上に重ねられて透ける男であるはずのこと、それらが、宝塚たるところを、歌舞伎たるところのものを主導する。祝祭的で演技的になる。

ただしその際、仮象性が過度に墮し、無意味に時間を浪費する不真面目な仮象的行為に淫する時、仮象は

真正の、生の再活性化創造の契機を失い、戯的になる。

遊びは本来、構成的に、真面目な生の仮象のパラフレーズを特徴として内に持つのである³²。その仮象性が遊びの空間の軽快さと非日常性を生み出して来る。

さて、では都市の街頭に接して娯楽施設や歓楽施設があったり、娯楽的雰囲気や歓楽的気分が漂っていることは、時折、都市に住む人々——とは云え、都市の住宅地区の平凡な普通の日常に住んでいる人々——が、毎日の真面目でそれ故に重い生活の否定的で逃避的な単なる休息や弛緩、場合によっては忘却を装うための消極的な、在れば在った方がましな程度のものか？

気温の暖冷や物の大小の様に、同一地平に並存するカテゴリーの対立関係に、その雰囲気と日常生活世界は、対置されるべきものであろうか？

都市が農村に対立する第二義の意味で成立することを止めて以来、生まれて以後一生を都市内にのみ住むような人が出現している今³³、都会的なことと都市は、既に人間の根幹的な存在様態と合致するもの具現となったと解しても異論ないところだろう。

実存的なるものとの、直接するか又はそれを射程にした写像的変換かの、存在論的に構成に位置を占めるような重さを持っているはずである。

都市の街路での遊歩や娯楽休日は、日常の真面目で素地の生からの、たまたまのスリッパアウトとしての彷徨いでも、着実な経過の時間と天と地の間(あいだ)に住まうことの停止や放棄のみに留るが如き消極的な遊歩行為でもない。

日常の生と地平を違えて厳しく激しく対立し、なおかつ、積極的に相支え合う別の生の根拠として、現存在の現に個有の位置づけを持つ。それが、都市の街路の気分づけられた空間である。

真剣な吝嗇精神や懸命な努力は、その気分を水をかける野暮となる。生活実感に直下に触れる品物——例えば野菜や魚肉など——を売るマーケット街や市場よりは、生活臭から遠い物——化粧品、遊具、遊戯場や娯楽街など——を扱う商行為の街路の方が、よりその雰囲気を帯び易いことは、誰れしも周知の、自分の内部の体験の実感証言から周知のことである。

それでもやはり、そこで行われる行為は、日常生活世界でなされるそれと、客観的で機能的事実と寸分違

わない。同じような食べものや飲み物を食べ飲み、スーパーよりは高いがやはり同じ衣料品を買い……。

つまりは、家で飲めば同じ酒も同じではない、家で食べれば同じハンバーグステーキでも同じではない、とする何かがあると云わねばなるまい。又は、同じであることを理解しているが、更に別なるなものかが添加されて来る事態と了解する意味構造があることかもしれない。

休日の住宅街は雰囲気を一変させるが、街の中心の街路では日頃の曖昧な晴の気分を冴え渡らせて活々とさせるものが、遊びの仮象と同じものと現われ出ているとは、酒にもハンバーグステーキにもありありとは見えない。酒はやはり酒であり、ハンバーグステーキは、別の時空のものとして仮象的と云える程に変化したそれを食べているのではないのは明白だ。

しかし非日常的な気分に在ることは、既に何回も素描して来たように、事実的である。

繰り返すと、街路の存在根拠は、生の基本地平に関連づけられており、単に実存的な日常生活世界の消極的なバイプレイヤーではないことに在る。というよりは、日常生活世界の内の、不可欠の半分を占めている、と云ってもよいだろう。

つまりは、遊びと同じように、埋没した日常の生の根拠を照り返し自らも輝く内在する個有価値を持ちえて、原価計算的な積みあげのパースペクティブ世界とは違って、街路は、軽快に越え出ている。

生理的充足や、経済的満足を超えてこそ、そこでの行為は街路の意図に添い、印象的で表現的であり、それ故に、確固として堂々として見えてくる。

§ 共同存在

活々した都市には、人々にぎわっている姿の街角を想起する。明らかに、都会らしさは、単なる社会学的事実としての人口の高密にはなく、現象としての集中、つまり雑踏とか賑わいといわれる人々の状況に関係を持っている³⁴。

また、山野や大海原での一人ぼっちは耐えられても、都市の人々の中の喧噪にあつての孤独は耐えられない程に強烈で凄惨ですらあるとか。

後者の事態は、都市らしさと云えるようなものが、又なおそこに在る人々が造る何ものかが欠除した事態

であろうとの直観は、人気のない不安が充ちるさびれた街を旅したことのある人には判りえるものだろう。

その直観は、自然や世界性の露呈の中の私の孤絶よりはもっと切実に現象としての孤独を、在るべき境位の地平への否定的な関与を意味して凄惨なものそれであろう。

その都会らしさに触れて、山崎正和は³⁵⁾、都市の人口の集積は、『ただ無名の人間が大量に集まっているということではなく、好奇心に満ち、刺激に敏感で、そして感覚や考え方の柔軟な人たち』の集合であらねば都市らしさには至らないという。そうゆう人々（の態位）が前提とも契機ともなって、無構造で自由な情報の伝達が、その相互に行われたり、行われる可能態にあったりする、いわゆる大衆社会が生成する。そのそこにこそ都市は在りえると言う。

分析的に契機別にはあるが、これまでに、空間の質としての気分の類同性、時間の現在性、非日常なる限られた場と物の立ち現われと見て来た処、遊戯の空間と、都会性の具現としての街路との間に、現象的に近縁のあることを直観する。

感情の質は同じであり、その程度を違えていると見ることも出来る。非日常の更なる下部構造の差異あることは、ここではひとまず措いて、現象空間の構造としては、はなはだ類同のものがあると言いおいても、以下の考察には支障はないものと想われる。

というのも、此処では、現象空間の素描から1歩進んで、そこでの人々の存在論時境位に焦点を当てて考察したいからである。

一体、既述の様な好奇心に満ち刺激に敏感な人たちは、どの様に在る存在様態だろうか？

このことを照し出すためにも、遊びのそれを見てもことは助けになることと考えられる。

再びフィンクによると、遊ぶ人とは互いに親密さ(Innigkeit)——フィンクの遊戯論の主旨は、遊びの世界開示性の鍵を、遊びの全体において了解的に内存在することとしての親密さに求めるところにあるが³⁶⁾、今回は、それは触れない。——にあつて、その遊びの手続きを体している人である。

『遊戯は、社会的実存が基本的になしうべきことである。遊びは、共に遊び、互いに遊ぶことであり、人間的共同社会の親密な形式である。遊ぶということは

構造的に、個人的、孤絶的な行為ではなく、共同の遊戯者としての他者に開かれているものである。』³⁷⁾

つまるところ、或る共通の雰囲気の上に描く相互行為的な図柄としての志向性の発揮が強く表に立っているかの様である。このことを、遊びの現象学的なあれこれの記述に専らしたR.カイヨワは、適切に以下の様に述べている。

『……大部分の遊びは、問いかけと答え、挑発と応戦、扇動と感染、興奮や緊張の共有である。遊びは、共感をこめて注目してくれる観衆の存在が必要なのだ。……偶然の遊びでさえ、……群衆の中の方が、より魅力的だと思われる。』³⁸⁾

遊びに際しての質の強烈さと相互主観的な顕在化を含む特殊化し個別化した共同存在構造が、それに透し見えて来る。非日常的ではあるが構造化されて約束化された情報のやり取りであろうし、個化した私の確立が、そこには在る。見る人としての大衆社会性を帯びた遊びの外に在って傍観することで参加している人と、遊ぶ私との区別、限界づけがはっきりと確立する。

このことを、E.フィンクは、陽気な気分を衝かれて自らを進んで規則に縛ってなされるコミュニケーション的性格(kommunikativer Charakter)に在ることと称する。人は、遊びに於て共遊(Zusammenspielen)とも相互遊び(Miteinanderspielen)とも云える相互関係に在る遊びの輪(Spielgemeinschaft)を仮象的に出現せしめる。遊ぶ人は、特別の高揚の気分(Stimmung)に気分づけられて一致調和(Stimmung)に在る。その気分は大きく遊びの外と内とを分けていることで、気分の生成は、仮象を見ることに通底している。

また、仮象はその二重性の故に正面視の対象野に現前するものであると考えられるから、その気分に至る予めの社会共同性は問題ではなく、集中することによる気分の共同こそが主調となる。

遊びは、没頭し過熱し、当の人の頭の中の全てを占める志向性の先になりえるものである。

それは至った先の開けに在ることを、既述の遊びの存在論的記述は指している。そこからどこかへと向う現在進行の境位ではない。それ故の場の濃密化としての高揚であり、結びつける力の強力³⁹⁾さであり、共同であることの顕在的確認としての遊戯行為である。

他方、街路での私は、単に分裂病の欠如の事態が教えてくれる基本的地平の社会性⁴⁰⁾とも、私的存在をその欠如態とする世界の共同性⁴¹⁾とも違う、更に別の地平のものであろうことは、先に見て来た。

基本的な気分の質は程度を薄めて遊びと同じであるが、その空間の限界づけを、在る人の視野の内には遊び程に顕在的に現出させない。

つまり眼前の仮象もなく、あれこれの関心対象にも気分的に影響されず、さし当りの事物の有用性や利用可能性にも留意せずに身体感覚的なリズム感で主に気分を支えられて、軽い昂揚と軽快さに身を在らしめている。

方向性の空間に在ることも身体化していることも手伝って、人は、“途上に在る”軽さを楽しんでいる。楽しむ身の自由と空間の開け、である。

それは、あれこれの特殊化に準備した“途上に在る”ことでもあり、どこか昂揚も背景的である。というのも、挑発や扇動や興奮を帯びるに拒絶的ではない空間の質ではあるが、その気分の生成を根源的に、それら相互交渉的な昂揚に負ってはいない。

現実的な場での“ものごと”を周縁へと押しやり、生活世界の生々しい疲れや臭いや活々した肉の喜びさえも、その場の気候に陰を射すと距離を置くことは、その場の気分の非日常（軽さへの昂揚）のリズム越しに、その質を通して、ものを見ることにつながる。丁度、それは遊びのパラフレーズによる仮象の世界の生成に相貌的に似る。仮象世界は軽妙で個有のリズムに占められている故にも……。

§ 結び——街路に在ることの意識

街路にあって私は私の個人的関心を特定の対象に向けて意識を特に鮮明にはしていない。しかしそれは不活発な停滞の様態に在ることを意味してなくて、珍しいもの輝くものへと転々とするキョロキョロした眼に現実化する如く、図と地とが截然として安定して分節していることではない状況に在ることを云う。

街路に在る意識は、一つの充実した明らかな輪郭をもった〈図〉に集中することよりは、〈その辺り〉に漂い拡散する意識——つまり、高さや広さの全体的な感知——であって、対象的に対応して (gegeneinander) 立つ (stehen) て見つめられる対象 (Gegenstand) である基本を解放された非現実様態に向かう意識である。そこでの“もの”は、ものたる根拠の実存的物性を表に立てない様態で見られ、それ故に遊びの仮象と現象的に似ている。どっしりとした実在の姿からは幾分離れ、軽い姿をしていて、記号的な形相関係に連り易い。それは、想像の産物や遊びの世界の仮象

の虚構性ほどの二重世界性は顕在しないが、両義的な実存と超越の漠然と未分化な状態のようである。反対に、ものの様態が、漠然と未分化に出現すればする程、場の雰囲気気分づけられていて、主体の確立度は、明瞭でないことになろう。酔酔時の私のように……。

その十全に厚味も触覚的直接性も実在の事物が呈せずに浮揚的に私から距離を取って在ることは、その程度の拡散さで、見る私というか散在する私というか、その私の視座を据える。

拡散する私、散在する私で、現実から距離をとった処に居付く私と他の私、ゆるい姿での共同 (Mitsein) に気分づけられ、調和させられている。

およそひたすらの熱意や興奮を呈する祝祭での没我の集団では決してなく、ひそやかな共通のリズムで非日常に超脱気味の、しかし現実性を帯同する程度の、軽い昂揚を伴う地平的な開けに身をゆだねた連帯に在る人々である。

というよりは、その開けに在ることから、存在的遊びとでも云えるような空間の気分に、参加する自主性を帯びた、集団以前の集団への、共調への準備と萌芽の態位に在ること、と云った方が適当であろう。

まして西欧の広場の Weltlichkeit⁴²⁾ へともたらず能力は備えていない。

文 献

- 1) 川添 登；都市空間の文化、17～20頁、岩波書店。
- 2) 魚住洋一；感情と空間、269頁（新岩波講座哲学④、世界と意味）。
- 3) HERMANN SCHMITZ; SYSTEM DER PHILOSOPHIE III /2. 98～106頁。(H. BOUVIER) 1981.
- 4) MARTIN HEIDEGGER; SEIN UND ZEIT, 134～148頁。(MAX NIEMEYER) 1972.
- 5) J-P. サルトル；哲学論文集、303頁、人文書院。
- 6) 18) 拙稿；街路にあることの気分と相互主観的存在構造について——(A)、雰囲気的素描・（共同存在的空間論⑥）——、広工大紀要、第19巻、昭和60年3月。
- 7) Th. クロスビー；建築・そのシティーセンス、23～24頁、美術出版社。
- 8) W. ベンヤミン；ボードレール（ベンヤミン著作集⑥）68～111頁、晶文社。
- 9) W. ブランケンブルク；自明性の喪失、181頁、みすず書房。
- 10) EUGEN FINK; Spiel als Weltsymbol 47頁。

- KOHLHAMMER, (遊び——世界の象徴として, 63頁, せりか書房).
- 11) 島崎敏樹; 人格の病, 142頁, みすず書房.
- 12) 拙稿; 街路にあることの気分と相互主観的存在構造について——(B)存在様態, 素描(共同存在的空間論⑦), 広工大紀要, 第20巻, 昭和61年3月.
- 13) E. FINK; 前掲書(以下 Spiel と記す)の他, 下記の二書に従った.
E. FINK; 遊戯の存在論, せりか書房, (以下, 存在論).
E. FINK; Grundphänomene des menschlichen Daseins (Alber) (以下, G. d. m. D.).
- 14) 例えば R. カイヨワ; 遊びと人間(講談社)など.
- 15) E. FINK; Spiel, 43頁.
- 16) E. FINK; G. d. m. D. 378~379頁.
他に, 林 愛子; 画面という場所(美学, 第36巻第1号, 1985年).
- 17) 細川亮一; 生きられる時間, 189~194頁(岩波講座哲学⑦, トポス, 空間, 時間).
- 19) O. F. ボルノー; 気分の本質, 63~66頁, 筑摩書房.
- 20) O. F. ボルノー; 前掲書, 78頁.
- 21) H. シュミッツ; 身体の状態感と感情, 391頁——現象学の根本問題——晃洋書房.
- 22) E. FINK; G. d. m. D. 420~423頁.
- 23) 拙稿; “歩く”ことをめぐっての身体感情と街路の気分. 素描——〈共に在る〉こと. その⑩——
日本建築学会大会梗概集, 843~844頁, 昭60年.
- 24) 山崎正和; 演技する精神, 173~206頁, 中央公論社, 昭58年.
- 25) E. FINK; 存在論, 30~31頁.
- 26) E. FINK; G. d. m. D. 386~402頁.
- 27) 木村 敏; 時間と自己, 133頁, 中央公論社.
- 28) 樺山, 奥田; 都市の文化, 35~49頁, 有斐閣.
- 29) E. FINK; Spiel, 105頁.
- 30) E. FINK; 同上, 89~104頁.
- 31) E. FINK; 同上——Spiel——32頁(拙訳).
- 32) E. FINK; 同上, 102頁.
- 33) 柳田国男; 明治大正史, 定本柳田国男集⑳. 215頁, 筑摩書房.
- 34) Yi-Fu Tuan; Space and Place, 59~61頁, Univ. of Minnesota Press 1977.
奥野健男; “間”の構造, 451頁, 集英社.
- 35) 山崎正和; 生存のための表現, 71~77頁, 構想社.
- 36) E. FINK; Spiel, 291~306頁.
- 37) E. FINK; 存在論, 39頁.
- 38) R. カイヨワ; 前掲書, 85頁.
- 39) E. FINK; 存在論, 54頁.
- 40) 島崎敏樹; 前掲書, 141~142頁.
- 41) 例えば, 和辻哲郎; 倫理学, 上, 334頁. 和辻哲郎全集第10巻, 岩波書店, 1977.
- 42) Christian Norberg-Schulz; The concept of dwelling, 56~63頁, Electa/Rizzoli 1984.